



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十四号(毎月一日発行)
平成九年七月一日

年表で読む

古平の歴史

《1》

■岡田弥三右衛門が

遙か蝦夷を望む

のちに古平場所を開いた岡田家の初代弥三右衛門が、近江の国(滋賀県)八幡から東北地方に行商に出て、陸奥の国(青森県)下北半島の北の端・大間岬から遙か遠くに浮かぶ蝦夷の島を見ながら、やがて自分もあの島に渡って商売をしたい——と考えました。

■東北地方と蝦夷

その頃は、まだ渡島半島のごく一部しか知られていないナゾの島・蝦夷は、大間岬からは約十八キロ、今、海底トンネルの通っている龍飛岬からは約二十キロの距離ですから、潮流の激しい津軽海峡でへだてられているといっても、島影が目の前に

見えているわけですから、古くから行き来があったことは考えられます。

■古平へ和人が住み

着いたのはいつ?

歴史で有名な、日本人にとつていつの時代にも大変な人気のある源義経が、衣川で自害したことはよく知られていますが、それは文治五年(一一八五)のことです。それから約八百年前のことです。しかし、義経は弁慶らの家来を引き連れて蝦夷に逃れて来た——という伝説は各地にあります。

その同じ年、義経を死に追いやった藤原泰衡は頼朝に攻め滅ぼされたが、その残党は蝦夷にまで逃げのび、北は余市、東は

鶴川(胆振)に至る各地に定住したことが、後の松前藩の記録の中にあります。

このようなことから、この頃に古平にも何人かが住むようになったのではないだろうか、と考えられます。

昭和四十三年に発行された『古平小史』という四十数ページほどの年表にも、このことが最初に載っています。

■古平場所が開かれる

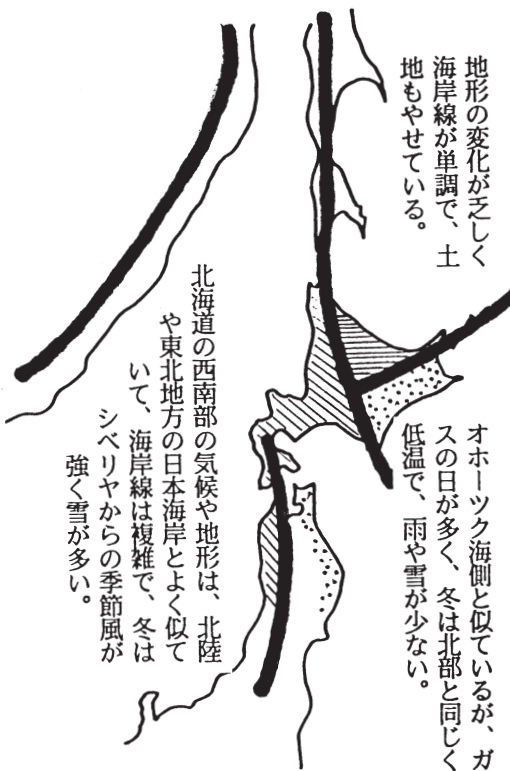
その後の古平については、それから約四百年後の慶長十一年(一六〇五)まで記録がありません。

松前藩が西蝦夷地(日本海沿岸)を上級の藩士に知行分として分け与えたことにより、古平は古平場所として開けました。

このとき古平は、だれの領地であったのかは分かっていませんが、当時は、すでに藩士に代わって岡田家が古平場所を支配していました。

ですから、岡田家の歴史を調べることによって、古平のことがわかるわけです。

北海道はこのような自然の中で開けたのです。☐



地形の変化が乏しく
海岸線が単調で、土
地もやせている。

オホーツク海側と似ているが、ガスの日が多く、冬は北部と同じく低温で、雨や雪が少ない。

北海道の西南部の気候や地形は、北陸や東北地方の日本海岸とよく似ていて、海岸線は複雑で、冬はシベリヤからの季節風が強く雪が多い。

◆生活を彩るクラブ

従業員の趣味や親睦の集まりとして、いろいろなクラブが結成されそれぞれ活動していた。

☆軽音楽クラブ

「ブルーエコー」という愛称で親しまれていた。楽器が全部揃わなくて編成が難しかったが、発表会もやり、一同は練習にも張り切っていた。

☆演劇サークル

サークルはできたが人集めに苦労した。年一回の発表会をするのが目的であった。

☆登山班

昭和二十九年結成、会員は三十人くらいで、積丹岳・余別岳など、付近の山々を踏破した。

☆野球班

全国金属鉱山野球大会北海道予選にも出場したが、適当な練習場所もなく、選手層も薄かったので一回戦で敗退した。

☆演芸班

厚生会関係の活動を主として

—百年の歴史を閉じる—

稲倉石鉱山 (15)

いた。

☆写真真班

引伸機を二台購入したものの暗室が無かったので、各家庭に運んで利用していた。盆踊りや運動会などを八ミリ映写機で撮影し映写会を行ったりした。また、会社や学校のアルバム作りをした。

◆労働運動の広がり

労働組合の結成 戦後の占領政策として、労働政策の面では労働組合結成が積極的に進められた。昭和二十年十二月には早くも『労働組合法』が公布され、戦時

中は全く姿を消していた労働運動が大きいうねりとして広がり始めた。

鉄興社でもいち早く労働組合結成の機運が高まり、各事業所ごとに労働組合が結成され、翌年一月には稲倉石鉱山労働組合が結成された。

そして同年四月、鉄興社従業員組合連合会が結成されるとこれに加盟した。しかしその後、企業整備などによる社内の情勢から、同二十四年九月には連合会組織を解散して、鉄興社労働組合として単一組織に一本化された。

◆物価高で手当てを支給

昭和二十年十一月には、戦後

の異常な物価の騰貴から応急処置として、とりあえず本俸の三割を上乗せすることと家族手当を十円に増額して支給した。しかし、すぐ翌月にはこの程度では不十分として、さらに増額して支給しなければならぬという始末であった。インフレによる物価の上昇は際限なかった。会社の通達では、

「——次二本手当テハ冒頭ニ申上候通り、現下ノ変調的物価高騰ニ対処スルヲ目的トスルモノナルヲ以テ、今後政府ガ強力ニ推進スルコトヲ約束シタル通貨収縮政策ノ実行ノ結果、物価ガ平常状態ヘ復帰シタル場合ニ
←(次ページ三段目へ続く)

賃金ベースの推移

昭和 年.月	賃 金 (円)
21. 1	300
21. 5	455
21. 8	600
21. 11	880
22. 6	1,300
22. 8	2,150
22. 12	3,600
23. 5	5,130
23. 8	6,080
23. 12	6,092
24. 1	7,780
24. 4	8,436
26. 5	9,255
26. 6	10,884
27. 1	11,986
28. 1	12,408
28. 5	13,721
29. 1	13,969
29. 3	14,536
30. 1	14,790
31. 1	16,492
32. 1	17,995
33. 1	18,911
34. 1	19,199
35. 1	21,833

遙かなる故郷の思い出

[34]

内地通いのヤミ船 ①

橘 義我 吾吾

ヤミ船と言っても、幽霊船の話ではない。今から四十五年も前のことなので、その思い出をたぐって書いてみようと思う。

戦争に負け極端に食べ物が不足して、政府が決めた公定価格ではなにも手に入らなくなり、ヤミ値なるものが当たり前に横行し、ヤミの物資が当時みんなの空腹を満たしていた。そこで、ヤミ物資を運ぶヤミ船が出現となるのである。

その頃、私はにわか漁師をやっていたがすけそ漁が切り上げになり、何もやるものがなくぶらぶらしていたら、ある日、防波堤で親戚の笠谷正吉さん（現在余市町在住）とばったり会った。なんでも小樽で発動機船の船長をやっていると弟から聞いていたが、久しぶりの再会だった。

「おめえ、今なにやってるんだ」

「今、ぶらぶらしてるベサ」

「どんだべ、俺の船さ乗らねが——」

「ん、仕事はなんだべ？」

「内地通いの船サ」

「ヤミ船だナ」と、すぐにわかつたが、

「俺にできるべが？」

「おめえは機械屋だから、機関士の助手にどんだ。船が故障した時にすぐ役に立つベサ」

「やったごどねえども、まアやつてみるが——」

これで話は決まった。それからすぐににわか船乗りになり小樽に出たが、乗る船は計画造船による戦時型の、焼玉エンジンで走る三十トンぐらいの木造船であった。乗組員は船長をふくめて六人で、元は手練

（前ページより続く）
於テハ、本手当テハソノ対象ヲ失ウ結果、廃止サルベキモノナルコトモ当然ニ候間コノ点付言致シ候。（略）」

とあったものの、いったん支給された家族手当などは労働者の既得権として、その後の賃金形態の中に組み込まれたいのであつたのである。

◆新しい賃金支給方式
昭和二十三年頃から賃金支給方式の合理化が叫ばれるようになり、会社では今までの身分制度を廃止して、新しい賃金制度に抜本的な改正をした。

戦後の続いたインフレには、生活給のような意味で暫定手当として支給し、生活上の不安に

船だったのでウインチも付いているが、何しろ戦時中につくった粗製乱造の船だったので海水も

れが多く、最初は大丈夫かなと思つたが、そのうちなれたら気にもならなくなつてしまつた。

ある時、航海中に大時化に合い、頼みの排水ポンプも故障して、海水が船の中に滝のように

対処した。

昭和二十三年 技能給制度を

導入した

同 二十六年 職務区分制度

を導入した

同 三十三年 職務区分制度

と人事序列を設けた資格制度を導入した

ただし、稲倉石鉱業所では昭和二十八年以降、鉱山という特殊性から他の事業所の賃金制度と分離し、職階制度を実施していた。



流れ込んできた時は、このままおだぶつのであるのでは——と覚悟を決めたが、プロの船乗りはさすがに落ち着いたもので、すぐにバケツリレーの要領で、全員で時化のおさまるまで海水をくみ続け、危うく難を逃れることができた。その後のポンプの修理は私の仕事であつた。

お・ど・ろ・き

同じ『方言』が 酒田にもあった



富山市 高橋 藤蔵

(元・稻倉石鉱業所勤務)

先日、編集室の村井さんから送っていただきました「せたかむい」の八十九〜九十二号に載っていた古平の方言を読み、私の生まれ在所である酒田（山形県）の方言と、余りにも似ているのに驚きました。

今は、教科書によって口語が統一され人の交流も激しくなり

ましたので標準語が浸透し、方言は徐々に社会の片隅に追いやられつつありますが、時折、郷里に旅したときに年老いた兄妹と交わす言葉は、決まって小さい頃に使い慣れた方言が丸出しとなつてしまします。

紹介された方言の中
あぐど かかと

あじらえる	頼んだ
あつちや	あちら
あねつちや	姉・年頃の娘
あべ	行こう
あめで	腐りかけ
あんちゃ	兄・少年
あんべえ	調子・具合
いぎ	新鮮
いぎなり	急に
いさば	魚
いっぺ	いっばい
うそごく	嘘つき
うめえ	うまい
えがった	良かった
おおまぐらい	大食い
おがる	大きくなる
おごられる	叱られる
おつかねエ	怖い
おっほ	尻尾
おぶさる	背負ってもらう
がおった	疲れた
かぎだし	請求書
かっぱらう	盗む

かしがる 傾く
かちやべね ひ弱
がっちゃぎ 痔
は、全く同じ語句であり、一層親しみがわいてきました。
共通するルーツがきつとあるのではと思ひ、考えてみたのですが、酒田も古平も古くからの湊町であったこと・酒田湊から北海道へ船で米を運び、帰りに昆布などの乾物を積んできたという記録もありますし、酒田からの出稼ぎや移住、酒田に寄港した江差への北前船が足を伸ばして古平まで来たとか、あるいは、漁師の言葉が浜伝いに伝わったのでは等と註索をめぐらしてみましたが
「おらはあ、あめた頭をいじくり回してかんげえでみでもせえ、なーもかもわがんねえがった。
仕方ねんでしょ」

★九十二号に『ヤマの灯は消えても』という題名で、かつての稻倉石鉱山の生活ぶりを書いてくださいました高橋さんが、わざわざワ

ープロで打って原稿を送ってくれましたので、その原稿のままをここに掲載しました。題字の文字だけ大きくしました。





〈紙風船の図柄〉

富山市中にある五百圓寺は、市民の心のふるさと、一年の美りを見守ってきた石仏の表情はおたやかです。紅葉の便りが届きはじめるころ、人も街も冬越しの気配に入ります。

「元禄三拜(二六五)のことで、藩主の名は正甫、あまりの効き目にたちまち大評判になり、二百六十余りの大名から薬の行商を頼まれ、それが富山の売薬のはじまり」だ、とあった。

テレビの『水戸黄門』はその

高橋藤藏さん からの便り

先の九十号に載った、竹内コトさんの「富山の薬売り」を読んだ高橋さんから、むかし懐かしい四角形の紙風船が送られて来ました。

NHKテレビ(5/30)でも放送された、売薬の町・水橋町まで出向いて紙風船を探したところ、今は全部ビニール製の風船でした。それで薬種商の『記念館』へ行ってみたところ、そこに、市が観光と宣伝用に作っている昔と同じ四角い紙風船があったので、それをわざわざ送って下さったというわけです。

早速竹内さんにお届けしましたが、「私の書いたのを見て、知らない人からこんな心づかいをさせていただいてありがたいことです」と、大変感動された様子でした。

富山の薬売り

今月始め(6/9)遅い夕食をしながらテレビで『水戸黄門』を見ていたら、城中である大名が突然腹痛を起こしたが、そこに居合わせたひとりの大名が丸薬を取り出し飲ませたところたちどころに腹痛がおさまり、これが評判になって一躍、富山藩の薬が有名になるといふのがこの物語のはじまりであった。

たしか『富山市史』で見たような気がして探してみたらやはりあった。

富山市史によると、これは

事実と、還暦を過ぎて六十二歳になつてゐる光圀公の黄門さんを、うまく組み合わせさせて物語にしたわけである。



その時の丸薬が「反魂丹」といい、平成三年夏、たまたま訪ねて来てくれた富山市の大光製

薬取締役・高島一郎さんから、その年、札幌市で反魂丹発売三百年記念行事が、北海道内の関係者によって開かれるということをお聞きした。

漁村でよく売れる薬は、かぜ薬・虫下し・神薬・あんま膏などで、景品として使っていたのは風船や絵紙のほか、支払額によつて塗りばし、茶わん、桐箱に入った銚子などまであったという。

古平と富山の売薬とのかかわりについては、また改めて書いてみたい。

柳

渡辺ハツエ

ちっばけな菜園猫に逆らわれ
治安維持誇った日本も銃社会
運勢欄孫の分までたしかめる

亡夫の霊に 魅せられて



渡辺 ハツエ

亡夫の一周忌法要も滞りなくすまして、いま改めて月日の経つのが早く感じられる今日この頃です。

かえりみると、主人が亡くなってから私は、暇をみてはゴミ出しの日に合わせて主人が愛用していた漁具、その他のものをごみとして出していました。いまでは無用の長物となってしまいました。捨てる度に亡夫に謝して、ゴミ小屋へ運ぶのにも足取りが重く、胸にこみ上げるものがありました。

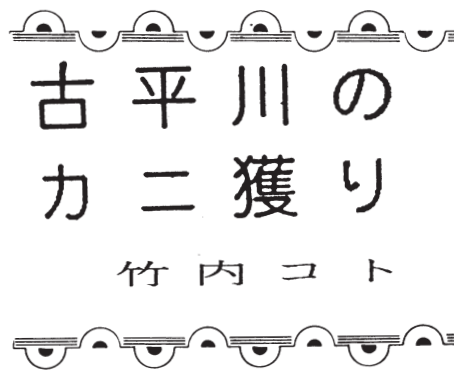
今日も、納屋の二階にある二台の除雪ダンプを、燃えないゴミの日に出そうと思つて下ろしたところ、鉄製のダンプの重いには驚きました。

ダンプには「昭和四十七年」「昭和五十年」とマジックインクで書かれていましたが、当時は重いナと思つたこともなく除雪に励んでいたものでした。港

町の舟揚げ場へもソリに積んで運び、ずいぶん活躍してくれたこの除雪ダンプにはいろいろな思い出があります。いったんは外に出したのですが、また納屋に入れてしまいました。いつになったら「ゴミ」にするつもりなのだろうか。苦笑せざるをえない。

法要もすんだ数日後、私は仏前のお花を下げて一束にして海に流そうと思い、通称、岬の浜へ行つた。南東の風が吹いていて、水産高校の舟揚げ場には高波が押し寄せていた。これではお花は沖へ出ないで渚に寄せられてしまうと思ひながらも、防波堤に立って荒海へ花束を投げ入れた。なんと花束は大波を乗り越つて、まっすぐに大海原へ出て行つてくれた。私は放心したように花束を見送つていた。私は平静を取り戻してから、これはまさに仏の化身であると

直感した。在りし日、愛舟「健正丸」に乗つて活躍していた頃の亡夫の勇姿である。海に投じた花束そのものが、亡夫の霊であつたのを魅せられた思いがしたのでした。合掌



古平川の 力二獲り

竹内コト

私が小学生の時でしたから昭和十年頃、相変わらず世の中不景気が続いていました。とにかく働かないことには口に食べ物も入りません。その頃は、どこの家でも子どもの七、八人はおりましたし、また、子どもたちはいろいろな遊びも工夫していました。

夏になると、兄たちは親に見

つからないようにして、「すしにしん」をそつと持ち出してはカニ籠の中に入れ、それを古平川にはおりこむのです。そのカニ籠ですが、まず針金で大・中・小の三つの輪を作り、刺網の切れっぱしでその周りをぐるぐると巻き、下の方にカニの入るくらいの小さい穴をあけておきます。カニは、その穴から中の餌を食べに入ってくるという仕掛けです。何人かの友だちと兄たちは、日暮れ時を見計らつてはよく西野さんの裏の川へ行つていました。

翌朝、早く起きて早速カニ籠を引き上げに行きます。四角い甲羅のカワカニはおいしく、いいおやつ代わりでした。黒い毛でおおわれていて固い殻でしたが、かじったときのじわつとする味は今でも思い出します。

当時は、こうして兄たちがよく下の者の面倒を見てくれたものです。これも貧乏？ だつたから知つてることなんでしょう



時雨ふる峠は暮色に包まれて近づく里はこぶしの花咲く
 天気よくバスにゆられて半島めぐり峠の雪に大雪山を思ひ出だせり
 オープンされしプールはこの寒さに夜を灯すも人の気配なく
 四階より桜の満開を見下して病む友としばし窓辺に和む
 風にのり舞ひこし桜のいく片を載せて大根緑にしげる
 うら庭の大き桜の木の陰にひっそりと咲くスズランの花
 吾を見て飼へる小るりは考える仕草に首を傾けて啼く
 稚な苗守るがに田をうめし水空ゆく雲の影をうつしぬ
 細く暗きトンネルを抜け見下ろして奇岩置く海に歓声あがる
 余市川流るる岸の柳の群まるく繁れり水無月なかば
 花びらの幾ひら土に馴染ませる逝く春への人の思ひにも似て
 諍ひの夢を見し日はその上司に好みの菓子をお茶に添へたり
 さ庭辺にピンクの絨毯敷きしごと散りし桜の斯くも美はし
 さうでなくとも太目の足にルーズソックス歩める象の足にかも似る

竹内コト
 長崎フユ
 榑佳代
 菅原節子
 鈴木時子
 田中香苗
 堀典子
 丹後初江
 池田テル
 堀昭子
 山口スエ
 田中友子
 金杉すみ
 片山栄志

古平ホトトギス会

茄子の花実になるまでの日数読む	斉藤波留
睦まじきことは麗し去年今年	越野清治
更衣晴れて卒寿を迎へたり	水見句丈
山菜の風味嗜しむ炒めもの	長谷川和子
鮎漁の新造舟を祓ひをり	山口浪
療養の妻に夕餉の鮎を焼く	越野敏雄
横文字の欠けし寢墓やタンポポ黄	仲谷美砂
母の日や娘の縫ひ呉れしコート着て	大島喜恵
青ドグイ土手の景観空ばかり	越野スミ子
牡丹の添木に傘を結えをり	仲谷比呂子
囀のこぼさぬ大樹に憩いけり	福井久美子
郭公の姿とらへし野球場	福井幸平
弔辞読む声寒涛に途切れけり	大和田絵伊
人参の若葉間引きの坪畑	仲谷安代

おはぎ
..
ぼたもち

福井幸平

うちの孫から「ボタ餅とおはぎどこが違うのか」と聞かれ、さてさて不用意に答弁も出ず調べてみたら、おはぎはお彼岸につきもので、萩の餅ともいわれるくらいですから、昔から秋の彼岸のものだったのでしよう。

また春に作るとボタ餅で、秋はおはぎと区別する人もいる。ではボタ餅のぼたはボタンらしい。聞くところによると、花札の牡丹からとったという説もあるが、確かでない。ついでだから、ベコ餅は誰に聞いても牛からとった名で、黒白まだら模様である。これも東北の方言か。ベコベコと古平でも発言する。

子供の頃、美国の生徒とけんかすると、古平のブタ（豚は新地方面、丸山町あたりで相当飼っていた様で）野郎、美国のベコ（牛）とのしり合った少年時代があった。もちろん青年団の陸上競技記録会等も対抗意識丸出しで、よくけんか等もあった。

